

経済と経営 1-2 (1990. 11)

〈論文〉

ヘーゲルの相互承認論の形成と構造 (4)

高 田 純

目 次

- I はじめに
- II 相互承認に向けて
 - 1 愛の共同体の可能性 —— ベルン期, フランクフルト期
 - 2 共同体と自由 —— イエナ初期
 - 3 有機的共同体と承認 —— 『自然法論文』, 『人倫の体系』 (以上 57 号)
- III 承認論の確立 —— 『イエナ実在哲学』
 - 1 承認論の地平
 - 2 愛と承認
 - 3 承認の闘争
 - 4 共同体と承認 (以上 58 号)
 - 5 法と承認
 - 6 市民社会と承認
 - 7 国家と承認
 - 8 承認論の体系的地位 (以上 60 号)
- IV 承認論の拡充 —— 『精神現象学』
 - 1 生命, 欲求, 他者
 - 2 相互承認の弁証法的構造 (以上本号)
 - 3 承認の闘争
 - 4 承認と共同体
 - 5 承認とコミュニケーション
- V 承認論の展開 —— 後期の体系

IV 承認論の拡充——『精神現象学』

『精神現象学』で承認が主題的にあつかわれるのは「自己意識」の章においてである。この章の序論的部分では、自己意識から他の自己意識へのその関係が導出され、「A 自己意識の自立性と非自立性、支配と隷属 *Selbständigkeit und Unselbständigkeit des Selbstbewußtseins ; Herrschaft und Knechtschaft*」の節では、まず自己意識相互の関係は具体的には「相互承認」の関係であることが指摘され、つぎに、相互承認の実現は「承認をめぐる闘争」という形態をとることが示され、最後に、この闘争のさしあたりの解決は一面的で不完全な承認関係としての「主と奴」の関係となることが明かにされる。『精神現象学』における相互承認と承認の闘争についての分析は、これと近接した時期の2つの『イエナ実在哲学』における分析と比べていくつもの顕著な特徴をもつ。『精神現象学』の基本性格に制約されて、ここでの分析においては社会哲学的観点からの理解は後背に退いているが、そのかわりに、論理的解明は深化され、徹底化されている。また、相互承認概念が拡大されて、人間相互の、また人間と神人のあいだのさまざまなコミュニケーションの関係が相互承認としてとらえられている。

1 生命, 欲求, 他者

「自己意識」の章の序論的部分では、①自己意識の直接的形態は欲求であること、②欲求が充足される対象は生命であること、③この生命は個体ではなく、類としての生命であること、④しかも、欲求が真に実現される対象は、類を意識する存在者、すなわち他の自己意識であることが論理的に解明される。このような、自己意識からの他の自己意識の導出(〈自己意識—生命—類—他の自己意識〉)は『精神現象学』に独自のものであるが、それは錯綜しており、必ずしも明瞭ではない。以下、ヘーゲルの叙述に沿って検討しよう。

(1) 自己意識の構造

自己意識は、自分を対象とする意識である。このばあいの対象は二重であって、自分とは別に自分の外部に存在する他在であると同時に、自分自身である。自己意識は対象のなかに自分自身を見出すが、このことは、自己意識が自分を他在としながら、この他在との区別、対立を廃棄するという運動をつうじておこなわれる。「意識は自己意識としては二重の対象をもつ。第一の対象は直接的なものであって、……自己意識にとって否定的なものという性格によって特徴づけられる。第二の対象はすなわち自分自身であって、……さしあたり第一の対象との対立においてのみ存在する。ここでは、自己意識は自分を運動として表現するのであり、この運動においてこの対立が廃棄され、自己意識自身にとって自分自身との同等性が生じる」(Phä. 121f./135)。自己意識はこのような運動をおこなうものであって、本来「実践的意識」である¹⁾。

ヘーゲルは自己意識の基本的性格をフィヒテ的な自我と重ね合せながら考察している。

① 自我は自分を意識するが、これは自分を意識の対象とすることである。自我は自分自身を自分として確信する。この点では、「自己意識は、〈自我は自我である〉という、運動を欠いた同義反復にすぎない」(121/134)。ここにあるのは自我の無媒介的自己統一である。

1) 1809-11年の『哲学的予備学』の「精神現象学」(「中級のための意識論」)では、自己意識が実践的性格をもつことが明確にされている。「自己意識は他在の否定によって自分を定立するのであり、実践的意識である」といわれる(IV. 117)。『イエナ実在的哲学I』では、「意識」(理論的意識)の考察に続いて「実践的意識」がとりあげられる。そこでは、「自己意識」という術語は用いられていないが、「対自存在」という術語が登場している(JRI. 212/221)。『イエナ実在哲学II』では、自分自身を対象とする自我は理論的知性ではなく、実践的意志であるといわれる(JRII. 187/196)。「自己意識」という術語も一部で用いられる(187R./196R.)。

② しかし、自我が自分を意識の対象とするためには、自分を、自分から区別されて自分の外部に存在するものとしなければならない。すなわち、自我は自分を非我として自分から区別しなければならず、非我が自我に対立して存在しなければならない。「自己意識にとって区別がまた存在という形態をとらないばあいには、それは自己意識ではない」(ibid.)。ここにあるのは、自己区別、非同一性の契機である。それはフィヒテ的にいえば、〈自我が自我に等しくない〉、あるいは〈自我は非我である〉と表現されよう。

③ ところで①と②は総合されなければならない。対象=非我は自我の外部に、自我から区別されてその他在として存在するが、この区別は、自我自身が自分を意識するために生み出したものにすぎないから、この区別はみかけにすぎず、自我によって直ちに廃棄される。「自己意識は……自分自身を自分自身として自分から区別するにすぎないのであるから、自己意識にとっては区別は直ちに他在としては廃棄されている」(ibid.)。以上の過程をへて、自我は自己区別を媒介にして自己統一を回復する(媒介された自己統一)。

以上の自己意識の運動はつぎのようにまとめられる。「これらの三つの契機においてはじめて自己意識の概念が完結している。a) 純粋な、区別されない自我がその最初の直接的対象である。b) しかし、この直接的あり方はそれ自身、絶対的媒介である。それは自立的対象の廃棄としてあるにすぎない。……[ところで]欲求の満足はたしかに自分自身への反照であり、真理となった確信である。c) この確信の真理は二重の反照であり、自己意識の二重化である」(126/139f.)²⁾。

2) 後期の『エンチクロペディー』の「精神現象学」(「小現象学」)においては、自己意識の構造について以下のように、『精神現象学』とはやや異なった説明がおこなわれている。① 〈自我=自我〉という自己意識の直接的・無媒介的あり方は抽象的であって、実在性や客観性を欠く。「自己意識の表現は、〈自我=自我〉であるが、これは抽象的な自由である。……このような自己意識は実在性を欠いている。というのは……自己意識の対象と自己意識自身とのあいだにいかなる区別もないため、自己意識の対

(2) 自己意識と欲求

ヘーゲルは自己意識にまず、「欲求 Begierde」という特徴づけを与える。自己意識＝自我は、自分に対立する対象（非我）なしにはありえないが、同時にまた対象の自立性を廃棄して、そのなかに自分を見出す。自己意識は、対象を否定することによって自分を実現しようとする「衝動 Trieb」をもつ³⁾。この点で自己意識は「欲求」であるとされる⁴⁾。自己意識は「端的に自分にた

象であるものはそれ自身対象ではないからである」(Enz. § 424) —— 抽象的自己同一性の段階。②ところで、このような直接的で抽象的な自己意識はじっさいには対象との対立にまとわれつかれている。自己意識は意識よりも高い次元に位置するが、意識をやっとこえ出た段階では、対象と対立した意識のあり方を真に克服してはいない。自己意識は、対象と同一な自己意識自身と、対象と対立した意識とのあいだの矛盾におちいる。「抽象的自己意識は意識のやっと最初の否定であり、したがってまた外的客観にまとわりつかれている。……このことによって、自己は……自己意識としての自分と意識としての自分との矛盾である」 (§ 425) —— 対象との対立の段階。③そこで、自己意識は自分と対象のあいだの、あるいは自分と意識とのあいだの矛盾を解消し、対象において自己同一性（およびそれについての確信）を実現しようとする。これは、抽象的な自分に実在性や客観性を与えようとすることでもある。「客観に対立する自分自身のこの確実性としての自己意識は、自分がそれ自体で（本来的に）そうであるものを定立しようという衝動である。いいかえれば、自己意識は自分にかんする抽象的な知に内容と客観性を与えようとする衝動であり、あるいは逆にいえば、……与えられた客観を廃棄して、自分と同一なものとして定立しようという衝動である」 (§ 425) —— 対象との対立の克服と自己同一の回復の段階。

中期の『哲学的予備学』（1809-11年）にも、これとほぼ同様の、ただし簡略化された説明がある（IV. 118）。

- 3) 自我＝自己意識の衝動という理解もフィヒテの思想をふまえたものであろう。フィヒテは自我の活動の根本に「衝動」を見出すが、それは究極的には、「自我の自分自身との絶対的一致への衝動」であるとされる（『全知識学の基礎』 § 11）。
- 4) 後期の「小現象学」は、註2)のように、自己意識の一般的構造を考察したあとで、自己意識の直接的あり方を具体的には「欲求」としてとらえている。自己意識は対象の自立性を廃棄してそのなかに自己同一性を実現しようという「衝動」をもつことが

いして存在し、その対象に否定的なものという性格をしるすのであって、さしあたりは欲求である」(122/135)。自己意識の自己確信は「自立的対象の廃棄としてのみあり、すなわちそれは欲求である」(126/140)。なお、ここで問題となっているのは、対象を消費する *aufzehren* という欲求の具体的形態（それは『イエナ実在哲学』において示され、『精神現象学』においても「主と奴」の考察にさいに扱われる）ではなく、対象の自立性を廃棄して、対象のなかで自分を実現しようとする自己意識の基本的態度なのである⁵⁾。

ところで、自己意識が対象の自立性を廃棄することは、自分と対象との対立を廃棄し、自分との統一を実現することを意味する。したがって、自己意識の対象における自己実現はまた、対象における自己統一の実現である。この点でも、自己意識は欲求という性格をもつと説明される。自己意識にとって対象がその外部に、それから区別されたものとしてあることは、自己意識の現象面にすぎない。これに対して、自己意識の「真理」は、この区別を廃棄した自己統一である。そして、このような現象を廃棄して真理を実現することが自己意識の欲求なのである。「自己意識の現象とその真理との対立は……自己意識の自分自身との統一のみを本質とする。この統一は自己意識にとって本質的となければならない。すなわち、それは欲求一般である」(121/

示されたが、この衝動が具体的形態をとったものが「欲求」であるといえる。「直接的あり方における自己意識は……欲求である。」「意識の廃棄から生じた自己意識の自己確信にとっては客観は……空無なものとして規定されている」(Enz. § 426)。

自己意識における衝動と欲求 *Bedürfnis, Begierde* との関係については、『哲学的予備学』でもつぎのようにいわれる。「自己意識のなかには、まだ実現されていない区別の規定がある。このような区別一般が自己意識のなかに登場するかぎりでは、自己意識は……自分自身の否定の感情、あるいは欠如の感情、あるいは欲求 *Bedürfnis* をもつ。」

「このような対立を廃棄しようとする感じられた必要 *die gefüllte Notwendigkeit* は衝動である」(IV. 118)。

- 5) 「欲求はここでは、……自分が自分を満足させようとするための或る外的客観に対して向けられるというかぎりでの衝動という規定以上の規定をもたない」 (§ 426 Zu.)。

135)。

(3) 欲求, 生命, 類

ところで、ヘーゲルによれば、欲求という形態をとった自己意識が自分を實現する対象は事物一般ではなく、「生命 *Leben*」である。このような主張は唐突な感をまぬかれないが、これについてヘーゲルはつぎのように説明する。自己意識＝欲求は自分を対象＝他在として自分から区別しながら、この区別を廃棄して、自己統一を回復する。ところで、自己意識が対象のなかで自己統一を回復できるのは、対象自身がまたこのようなく自己区別－区別の廃棄－自己統一という運動をおこなうものであるばあいである。そして、このような対象はまず「われわれにとっては」——すなわち、自己意識の運動を外部から予めみとおしている観察者からみれば——生命であるというのである。「意識が自分へ還帰するように、対象は自分の側でわれわれにとって、あるいはそれ自身で自分へ還帰している。対象はこのような自己反照をつうじて生命となる。」「自己意識が、存在するものとして自分から区別するものは……、自分に反照した存在であって、直接的欲求の対象は、生命あるものである」(122/135)。なお、欲求が自己意識の基本的態度を表現するものであったように、ここで生命が欲求の対象であるというのは、生命が欲求による消費の対象であるという意味ではない。

生命は以下のように、〈自己区別－区別の廃棄－自己統一〉の運動をおこなう。

① 生命が自分を区別することは、個体のさまざまな自立的形態となることである——「形態化 *Gestaltung*」。形態は、その根底にある「普遍的実体」をその「非有機的自然」として消費する（食いつくす *aufzehren*）ことをつうじて自分を維持する。形態は「自分だけで [対自的に] 存在するものとして、あるいは、規定されながらも無限である実体として普遍的実体に対抗して現われ、この実体の流動性を否定し、……自分のこのような非有機的自然から

自分を分離し、これを消費することによって自分を維持すると主張する」(123/137)。

② だが、他方で、生命の普遍の実体は諸形態（諸個体）の区別を流動化し、それらを自分へと解消することによって自分を維持する——「生命過程 *Lebensprozeß*」。「普遍的なものを犠牲にして、自分自身との統一の感情をえた個体はまさにこのことによって、自分を自分だけの存在（対自的存在）と[・]している他者との対立を廃棄する。個体が自分に与える自分自身との統一は区別の流動化である」。「普遍的な流動的媒体 [普遍の実体] のなかにある生命、諸形態の静かな相互別々の展開 *Auseinanderlegen* は、まさにこのことによって諸形態の動揺・運動となり、過程としての生命となる」(124/137)。

③ このように、形態化と生命過程とは生命の運動の両面をなす。「したがって、生命の単一の実体は、自分自身が諸形態へ分裂するものであると同時に、これらの持続的区別を解消するものである。このようにして、全体的運動の二つの側面……すなわち、自立性というの普遍の媒体のなかで静かに相互別々に展開されていた形態化と、生命過程とは相互に帰入する」(124/138)⁶⁾。ところで、このように、諸個体へ自分を区別しながらも、これらを自分へ解消し、自己統一を回復する生命の実体は「類 *Gattung*」である。「最初の直接的・無媒介な統一から出発して形態化と生命の過程という契機をへてこれら両契機の統一へ、最初の単一の実体へ還帰するばあい、この[・]反照した統一は最初の統一とは別の統一である。」「それは[・]単一の類である」(125/138)。

6) 『イエナ実在哲学II』の自然哲学においては、生命は個体の環境（非有機的自然）にたいする関係、および個体と類との関係という側面から考察される（JR II. 112ff./116ff., 137ff./143ff.）。また、後期の自然哲学においては、個体の自分自身にたいする関係（形態化）、個体の環境にたいする関係（同化）、他者としての類にたいする個体の関係（類過程）が考察される（Enz. § 352.）。なお、『精神現象学』の当該箇所では、生命個体の環境にたいする関係はほとんど考察されない。

④ だが、生命の類には限界がある。類は自己意識とは異なって、自己区別を媒介とした自己統一を自ら意識することはない。「自己意識は、もろもろの区別の無限な統一が自分にたいして存在する [無限な統一を意識する] ような統一である」が、これにたいして、類は「このような無限の統一であるにすぎず、この統一は自分自身にたいしては存在しない [この統一を意識しない]」(122/135)。類がこのような限界を克服するためには、それは、生命のこのような自己統一を意識するような自己意識へ転化しなければならない。類は「生命自身の運動のなかでは、自分にたいしてこのような単一なもの [統一] として現存するのではない。このような結果において、生命は自分とは別の生命を、すなわち、自分にとって生命がこのような統一として、類として存在するような意識を指示する。」「ところで、このような他の生命にたいして類がそのようなものとしてあり、この生命が自分自身にたいして類である [類を意識する] ばあい、この生命は自己意識である」(125/138)。ここでは、自己意識の対象としての生命が類を媒介として他の自己意識へと転換すること (生命-類-自己意識) が、対象自身の側で示される⁷⁾。

(4) 他者の登場

つぎに、ヘーゲルは、自己意識=欲求の側からみて、それが充足されるための対象はいかなるものかを考察する。一方で、欲求は対象の自立性を否定

7) ここにおける生命から意識 (自己意識) への移行は、自然哲学における生命から精神への移行に対応する。自然哲学によれば、個体の死をつうじて類は維持されるのであり、個体は類のなかへ没落していく。これに対して、類のなかで自分を維持する存在者は、類を意識する存在者 (「自由な類」としての存在者)、すなわち精神である。類としての生命から精神 (自己意識) への移行について、後期の「小論理学」の「理念」論においてはつぎのようにいわれる。生命の理念は「自分自身……に到達し、自分自身にたいしてある自由な類としてのみ現存するようになる。たんに直接的な個体的生命の死が精神の出現となる」(Enz. § 222)。

することによって自分を充足するが、他方で、対象は欲求の外部に、欲求から自立して存在していなければならず、欲求の充足は対象によって制約されざるをえない。欲求が対象の自立性を否定して、自分を充足しても、また別の対象が自立的なものとして現出し、これによって別の欲求がよび起こされる。このように欲求は対象との悪循環(悪無限の過程)におちいる。「欲求と、欲求の充足において獲得された自分自身の確信とは対象によって制限されている。というのは、欲求の充足はこの他者 [対象] の廃棄によるものであるが、このような廃棄がおこなわれるためにはこの他者が存在していなければならないからである。したがって……自己意識は [対象にたいする] 否定的な関係によっては対象を廃棄することはできない。自己意識はそのためむしろ対象と欲求とを再び生み出すことになる」(126/139)。

したがって、自己が対象において満足を与えるのは、対象が一方で自立的でありながら、他方でその他者としての自己意識のために自立性を自ら否定するばかりのみである。このような対象は、意識をもった存在者、すなわち他の自己意識にはほかならない。自己意識は自分を他者へと否定しながらも、同時に自分を維持するものであって、このことは自己意識のあいだにも妥当する。他方の自己意識はその他者としての一方の自己意識のために自分を否定しながらも、自立的であり続ける。「対象は自立的であるのであるから、それ自己意識が……満足を与えるのは、対象が自分自身のこのような否定を自分の側で遂行することによってのみである。」「対象が自分自身の側で否定をおこなわないながらも、同時にそのさいに自立的であるのであるばあいには、この対象は意識である」(ibid.)。

ところで、ヘーゲルは、欲求の対象としての生命が自立的でありながらもその他者すなわち欲求=自己意識のために自己否定をおこなうのは、どのようなばあいであるかを問うて、つぎのようにいう。「欲求の対象である生命のばあい、否定がおこなわれるのは、他者すなわち欲求の側であるか、他の無関与な形態に対する規定としてであるか、非有機的な普遍的自然として

であるかのいずれかである。しかし、絶対的否定としての否定をおこなうのがこの普遍的な自立的自然であるばあいには、この自然は類としての類、すなわち自己意識としての類である。自己意識は他の自己意識においてのみその満足を与える」(ibid.)。このような主張の主旨は必ずしも一義的ではないが、前後の文脈からみて以下のように理解してよいであろう⁸⁾。

① すでにみたように、欲求は対象としての生命の自立性を廃棄することはできず、この意味で、自己意識としての本来のあり方を否定せざるをえない。このように、否定は欲求の側でおこなわれる。

② 生命が個体であるばあい、個体は、他の個体から区別された形態をもつ。個体の自己否定は他者としての他の個体(形態)にたいするものとなる。個体は他の個体から自分を区別しながらも、このような区別を解消するのであり、他の個体のために自己否定をおこなう。だが、個体(形態)はこのような自己否定をおこないながら同時に自立化することはできない⁹⁾。「たんに生命をもつにすぎない[他者から]区別された形態もたしかに生命過程そのものにおいては[他者のために]自分の自立性を廃棄するが、それは自分を区別することによって、そもそも自分が形態であることをやめてしまう」(127/140)。

③ そこで、他者のために自己否定をおこなうのは、個体にとっての「非有機的自然」としての普遍の実体である¹⁰⁾。この実体は自分を否定して、自分

8) ここでいわれる「否定」は他者の否定ではなく、文脈からいって、自分自身の否定であろう。

9) ヘーゲルはここでは個体のあいだの他者関係よりも、個体と類とのあいだの他者関係を中心に論じている(Phä. 123/137)。個体が他の個体との区別を解消するのは根本的には実体の威力によるのであって、実体が個体にとっての他者とされる。

10) 註6)で注意を喚起したように、当該箇所でもとりあげられるのは、生命の外的環境にたいする関係ではなく、個体の類にたいする関係であって、「非有機的自然」、「普遍的な実体的自然」は環境を意味するのではなく、生命個体が自分の維持のために作用する他者としての生命実体を意味する。

を諸個体へ区別し、これらを自立化させながらも、同時に自分を自立的なものとして維持する。このような実体は類にほかならない。しかし、類はその他者としての欲求のために自分を否定するのではない。したがって、欲求はその対象としての類から他在的性格を除去して、そのなかで自分を満足させることはできない。

④ 自己意識が自己を実現するための対象は、類を意識する対象、すなわち他の自己意識にほかならない。「自己意識の対象はこのように自分自身を否定しながらも……同時に自立的であり、このことによって対象は自分にとって類であり[類を意識しており]、生命をもつ自己意識である。」「欲求の対象は、破壊できない普遍の実体であるから、……自立的であるにすぎない。[だがここでは] 自己意識が対象となっているから、このような対象は自我であると同時に対象である」(ibid.)。

このように、他の自己意識においてはじめて、自己意識はその他在のなかに自分自身を見出すことができるようになる。「一つの自己意識が他の自己意識にたいして存在する。このことによっではじめて自己意識がじっさいに存在する。というのは、ここではじめて、その他在のなかで自分自身と一致することが自己意識にとって存在する [意識される] からである」(ibid.)。

(5) 事物から他の人間への対象の転換

以上みてきた『精神現象学』における、自己意識の対象にたいする関係(自我—非我)から自己意識の他の自己意識(他我)にたいする関係(自我—

金子武蔵氏は、ここでの「普遍の実体」を「環境に宿る普遍的生命」とみなし、個体の実体にたいする関係を結局、個体の環境にたいする関係として理解しているが(ヘーゲル『精神の現象学』訳、岩波書店、上巻、総註、683 ページ)、これには同意できない。また、加藤尚武氏も金子氏に近い解釈をとっており、「非有機的自然」を「大自然」とみなしている(『ヘーゲル哲学の形成と原理』未来社、1980年、131 ページ以下、136 ページ)。

他我)への転換の論理は独自のものである。そこでは、まず自己意識が欲求という形態をとり、この欲求の対象が生命とされ、さらに生命が個体から類へ移行し、最後に、類を意識するものとしての他の自己意識へ到達した(欲求-生命-類-他の自己意識)。この論理をイエナ期の他の論稿、および中期・後期の著作における論理と比較してみよう。

『イエナ実在哲学I』および『イエナ実在哲学II』においても、自己意識に相当する実践的意識(意志)の考察は欲求の分析から出発していた。ただし、そこでは欲求は社会的、具体的脈絡で理解されており、『精神現象学』におけるように自己意識の本性(自己実現のために対象を否定するという)からの論理的帰結としてとらえる視点は必ずしも鮮明ではなかった。また、二つの『イエナ実在哲学』においては、欲求の分析はさらに労働の分析へと進んでいった。欲求は受動的であり、その充足は結局は一時的にすぎず、実践的意識は欲求という形態では対象のなかで自分を持続させることができない。これに対して、労働においては実践的意識は欲求を直接に充足するのではなく、むしろこれを一時的に中断し、抑制して、欲求を充足するものへと対象を加工し、労働の産物のなかで自分を持続させる。(この分析は『精神現象学』においては「主と奴」の部分でおこなわれる。)ところで、『イエナ実在哲学』によれば、労働の対象や産物も事物的なものであるかぎり、実践的意識はその他者性を廃棄して、そのなかに真に自分を見出すことはできない。このことが可能となるのは、対象がもはや事物ではなく、他の意識である場合である。実践的意識の他の意識にたいする関係は具体的には家族における愛の関係であって、この関係において実践的意識は自立的な他の意識のなかで同時に自分を直観することができる。このように、実践的意識の分析は<欲求-労働-愛>という過程をたどる。そのさい、『精神現象学』におけるように生命(類)を媒介とすることなく、実践的意識の対象は事物から他の意識へ転換されており、また、この転換は社会的、具体的脈絡でおこなわれる(III-2-(1))。

『人倫の体系』においても、〈欲求－労働－愛〉という論理がとられていた。そこでは、労働の対象が無生物－植物－動物へ移行し、労働の形態も社会的にいつそう具体的にとらえられて、植物の栽培（農業）から動物の飼育（畜産）へ移行し、さらに自然物への作用としての労働は他の人間への作用としての陶冶 *Bildung* へ移行した。そして、家族における愛において個人は他の個人のなかに自分を直観するようになることとされた（SdS. 14ff., II－3－(4), (6)）。

後期の『エンチクロペディー』に含まれた「精神現象学」（「小現象学」）、および中期（ニュルンベルク期）の『哲学的予備学』の「精神現象学」（1809－11年「中級のための意識論」）においては、自己意識＝欲求の対象は自然物一般とされ、生命（類）を通過せずに直接に他の自己意識へと転換させられており（〈事物－他の自己意識〉）、しかもその説明は簡単にすまされている。ヘーゲルは、自我が対象のなかに自分を直観することができるのは、この対象が自我と同様の構造をもつばあいであるという基本的理解をとる。『精神現象学』においては、この論理が〈生命－類－他の自我〉という過程をたどるが、中期および後期においては、この論理は簡略化され、自我は、自我の外部に自分から区別されて存在しながら、自我と同一のあり方をするような対象、すなわち他の自我において自分を見出すと説明されるにすぎない¹¹⁾。

後期の「小現象学」についていえば、そこでは、『イエナ実在哲学 I』や『イエナ実在哲学 II』にやや近く、欲求はつぎのようにより具体的にとらえられている。（ただし、『精神現象学』のばあいと同様に、欲求と労働との関係については言及されていない。）欲求は対象にたいして消費という否定的態度と

11) なお、「小現象学」においては、生命についての意識から自己意識への転化にかんして、つぎのような指摘がある。「[生命のなかで] 区別されたもののこのような生きた統一という弁証法的統一にかんする意識においては、自己意識が点火されている」（§ 423Zu.）。

るにすぎず、欲求の充足は一時的であるにとどまり、再び新たな欲求が呼び起こされ、欲求の充足は「無際限な進行」をもたらす (Enz. § 428 u. Zu.)¹²⁾。自我が客体において自分を実現できるのは、この客体がもはや事物ではなく、「自由な客体」つまり他の自我(他我)であるばあいである。「自己意識は……他在という規定をもつ自分自身を自分自身に対置し、他者を自我によって充実し、他者を、自己をもたないなにか或るもの [事物] から、自由な客体、自己をもつ客体、すなわち他の自我とした」 (Enz. § 429 Zu.)。

中期の『哲学的予備学』においては、説明はいっそう簡単なものとなっている。「同時に客観的であるような主観としての自己意識という概念は、自己意識にたいして他の自己意識があるという関係を与える。」「自己意識は他の自己意識にたいしてあることになるが、このような自己意識は、他の自己意識にたいするたんなる客体としてあるのではなく、自分が別の自己となったもの(自分の他の自己)としてある。……したがって、自我は自我にとって対象となり、このことによって自我はこの側面からみて自分にとって、自分がそうであるものと同一のものとしてある。自我は他者において自分自身を直観する」 (IV. 119)¹³⁾。

12) 後期の「小現象学」において、「対象にたいする欲求の関係はなお全く我欲的な破壊の関係であって、形成の関係ではない」 (Enz. § 428Zu.)といわれるが、ここでは欲求と労働との関係はとりあげられない。これが扱われるのは、『精神現象学』のばあいと同様に、「主と奴」の部分においてである。

13) なお、1808-09年の『哲学予備学』(「中級のための意識論」)では、自己意識から他の自己にたいする関係への移行の説明がないまま、自己意識についての考察は直接に他の自己意識にたいする関係の分析から出発している。「自己意識はまず感覚的で具体的であり、自分および他の自己にたいしてこのような感覚的で具体的な対象としてある」 (IV. 78)。

2 相互承認の弁証法的構造

(1) 承認と共同性

自己意識が他の自己意識のなかに自分を見出すことは、具体的には、自己意識が他の自己意識によって承認されることによって実現される。「自己意識は即自的かつ対自的に他の自己意識にたいしてあるばあいには、またこのことによって、即自的かつ対自的にある。すなわち、自己意識は、[他の自己意識によって] 承認されたもの ein Anerkanntes としてある。」(127/141) ここに共同性(精神, 人倫)の地平が「われわれにとって」開けてくる。「このことによってすでに精神の概念がわれわれにとって現存している。以後さらに意識にとって生じてくるのは、精神とはなにかについての経験である。すなわち、……さまざまの対自的に存在する自己意識を自由に自立的にさせながら、それらのあいだの統一を維持するような絶対的実体、われわれである我と、我であるわれわれとを統一する実体とはなにか、についての経験である」(121/140)。このような実体は人倫的実体にはほかならないが、このことは、「V 理性」の章の「B 理性的自己意識」の節(233ff./255ff.)において、および詳細には「VI 精神」の章の「A 真の精神, 人倫」の節(292/318f.)において説明される。

(2) 自己意識の二重性と対他関係の二重性

「A 自己意識の自立性と非自立性, 支配と隷属 Selbstständigkeit und Unselbstständigkeit des Selbstbewußtsein ; Herrschaft und Knechtschaft」の節においては、主と奴の考察にさきだって、まず自己意識の他の自己意識にたいする関係が相互承認であることが明かにされ、その弁証法的構造が普遍的な形で示される。ここでの分析はきわめて緻密であって、自己意識の二重性から相互承認が論理的に導出される。ここにも、『精神現象学』における

承認論の特徴がある。「自己意識のなかで実現される無限性」の概念は、「二重化されながらこのような統一された概念」であって、「二重化されたこのような精神的統一の概念を分析すると、われわれにたいして承認の運動 *Bewegung des Anerkennens* が呈示されるようになる」(127f./141)。

自己意識はそもそも自分を自分自身と、自分から区別された対象とに二重化するものであった。自己意識はその他在としての外的対象のなかで自分自身を確証しようとする。自己意識の対象にたいする関係は二重の意味をもつ。一面で、自己意識は自立的な対象のなかで自分を否定するが、他面では対象の自立性を廃棄して、そのなかに自分を自立的なものとして見出す。このような自己意識の二重の性格は他の自己意識にたいする関係においても現象し、他の自己意識にたいする二重の関係となる。自己意識が自立的な他の自己意識のなかに自分を自立的なものとして見出すことは、自己意識が他の自己意識を自立的なものとみなすと同時に、自分自身を自立的なものとみなすことである。しかし、自己意識は他の自己意識を自立的なものとみなすために自分の自立性を否定しなければならず、また自分の自立性を肯定するためには、他の自己意識の自立性を否定しなければならない。このように、自己意識は他の自己意識にたいして肯定的かつ否定的に、二重に関係する。自己意識が目的とすることは、自分自身をも他の自己意識をも自立的なものとして肯定することであるが、自分自身の肯定は他の自己意識の否定によって、他の自己意識の肯定は自分自身の否定によって媒介される。『精神現象学』においては、このことは以下のように三段階に即して説明される。

① 自己意識にたいして他の自己意識が自立的なものとして現われるが、自己意識は他の自己意識のなかで自己意識が自分自身を自立的なものとして見出そうとする。自己意識にたいして他の自己意識は二重のものとして現われる。一面で、他の自己意識は自己意識とは別なもの、否定的なものであるが、他面で、それは自己意識自身であって、肯定的なものである。あるいは、自己意識の他の自己意識にたいする関係は二重である。一面で、自己意識は

他の自己意識のなかに自分を自分とは別のものとして見出すことによって、自分を失う。だが他面で、自己意識は他の自己意識を自分とは別の存在者とはみなさず、他の自己意識のこのようなあり方を否定して、そのなかに自分自身を見出そうとする。「自己意識にたいして或る他の自己意識が存在する。自己意識は自分の外部に出てしまっている。このことは二重の意味をもつ。第一に、自己意識は自分自身を失っている。というのは、それは自分を [自分とは] 別の存在者として見出すからである。[だが] 第二に、自己意識はこのことによって他者を廃棄する。というのは、自己意識は他者を実在的存在者 Wesen とはみずに、他者のなかに自分自身をみるからである」(128/141)。

② つぎに、自己意識は他の自己意識の他在性を廃棄するが、このことは他の自己意識の二重性を廃棄することを意味する。一面で、自己意識は、自分から区別されて自立する他の自己意識を廃棄することによって、そのなかで自分の自立性を確証しようとする。さきには、自己意識が他の自己意識を自分の外部に自立的なものとして見出し、自分の自立性を失なったが、ここではこの関係は逆転される。だが、他面で、自己意識にとって他の自己意識は自分自身であって、他の自己意識の自立性を否定することは自己意識自身の自立性を否定することになる。さきには、自己意識は他の自己意識の自立性を廃棄することによって自分の自立性を確認しようとしたが、ここではこの関係は逆転される。このように自己意識は他の自己意識にたいするさきの二重の関係を二重の意味で否定する。「自己はこのような自分の他在を廃棄しなければならない。このことは最初の二重の意味を廃棄することであり、したがってそれ自身第二の二重の意味をもつ。第一に、自己意識は、自分自身を実在的存在者として確信するようになるためには、他の自立的な存在者を廃棄することへ向かわなければならない。[だが] 第二に、自己意識はこのことによって自分自身を廃棄することへ向かう。というのは、このような他者は自己意識自身であるからである」(128/141f)。

③ ところで、②における自己意識にたいする否定的関係は自分自身にたいする肯定的関係をとめない、また自己意識の自己否定的関係は他の自己意識にたいする肯定の関係を含む。一面で、自己意識は他の自己意識の自立性を否定することによって自分の自立性をとり戻すが、他面で、自己意識は自分の自立性を否定することによって、他の自己意識にその自立性をとり戻させる。「このように自己意識が二重の意味の他在を二重の意味で廃棄することは同時に、自分自身に二重の意味で復帰することである。というのは、第一に、自己意識はその他在の廃棄によって再び自分自身と同等になるのであって、[このような]廃棄によって自分自身をとり戻すからである。だが第二に、自己意識は他の自己意識をそれに与え戻す(他の自己意識を回復させる)。というのは、自己意識は自分において他の自己意識であったのであり、他の自己意識において自分の存在を廃棄し、他の自己意識を再び自由にさせるからである」(128/142)。

このように、自己意識が自立的な他の自己意識のなかに自分を自立的なものとして見出すことは、自己意識が他の自己意識の自立性を廃棄して自分の自立性を実現すること(他者の否定を媒介にした自己肯定)と、自己意識が自分の自立性を廃棄することによって他の自己意識を自立的なものとして見出すこと(自己否定を媒介にした他者の肯定)とを含むのであり、自分と他者との二重の否定に媒介された、自分と他者との二重の肯定である。

(3) 自己意識の対他関係の二重性と相互承認

つぎにヘーゲルは自己意識の他の自己意識にたいする二重の関係から相互承認を論理的に導出する。自己意識が他の自己意識のなかに自分を見出すためには、自己の肯定＝他者の否定という行為と、自己の否定＝他者の肯定という行為とが同時におこなわれなければならない。ところで、このことが可能なのは、この二重の行為が同時に他の自己意識によってもおこなわれるばあいなのである。すなわち、自己意識による自己肯定＝他者の否定という行

為には、他の自己意識による自己否定＝他者（自己意識）の肯定という行為が対応しなければならず、自己意識による自己否定＝他者の肯定という行為には、他の自己意識による自己肯定＝他者（自己意識）の否定という行為が対応しなければならない。「他の自己意識にたいする自己意識のこのような運動は……一方の行為とみなされた。しかし、一方のこのような行為はそれ自身二重の意味をもっており、一方の行為であると同時に他方の行為である。」

「前者の自己意識は、まず欲求にたいしてのみあるような対象を相手にするのではなく、自分にたいして（対自的に）存在する自立的な対象を相手にする。したがって、自己意識がこの相手にたいしておこなうことをこの相手が自分の側でもおこなわなければ、自己意識はなにもなすことはできない。したがって、運動は端的に両者の自己意識の二重の運動である。」「行為が二重の意味をもつのは、行為が一方にたいするものであると同様に、他方にたいするものであるかぎりにおいてのみではなく、一方の行為であるのと全く不可分な形で、同様に、他方の行為でもあるかぎりである」(128f./142)。

ヘーゲルはこのことについて詳細な説明をおこなっていないが、その論旨はつぎのようであると考えられよう。自己意識Aと他の自己意識Bとのあいだで、一方で、AがBの否定によって自分を肯定できるのは、Bが自ら自分自身を否定してAを肯定するばあいである。すなわち、Aの自己肯定＝Bの否定というAの行為は、Bの自己否定＝Aの肯定というBの行為が同時になければ、実現されない。他方で、Aは自己否定によってBを肯定しなければならない。このことは、BがAを否定することによって自分を肯定することを可能とする。すなわち、Aの自己否定＝Bの肯定というAの行為は、Bの自己肯定＝Aの否定というBの行為をもたらす。このことをより立ち入って考察しよう。

① AがBの自立性を否定して、そのなかに自分の自立性を見出すことは、Aの一方的行為によっては不可能である。このことが可能であるのは、Aの自立化のためにBが自から自分自身を否定してくれることによってである。

すでにみたように、自己意識が対象のなかに自分を直観できるのは、対象が自己意識のためにその自立性を自ら否定するばあいであり、このような対象が他の自己意識にほかならなかった(124/139)。このことはさきには抽象的に示されていたのすぎないが、今や自己意識にたいする他の自己意識の行為として具体的に明かにされるにいたる。

② Bはこのように自己否定によってAを肯定するが、これと同時に、BはAの否定によって自分の自立性を確証しようとする。ところで、BによるAの否定という行為が実現されるのは、Aが自分を否定して、Bを自立的なものとして肯定するばあいである。

③ このようにして、Bの否定によるAの自己肯定、およびAの自己否定によるBの肯定というAの二重の行為は、Bの自己否定によるAの肯定、およびAの否定によるBの自己肯定というBの二重の行為を同時にともなっていなければならない。AとBとの二重の行為は両者のあいだで二重に、相互的におこなわれなければならない。ところで、一方が自分の自立性を否定して、他方に自立性をえさせることは、具体的には、承認である。そして、一方は他方を自立的なものとして承認するのは、他方も同様の仕方で一方を自立的なものとして承認するかぎりにおいてである。一方は、一方を承認してくれるものとして他方を承認し、他方も同様なものとして一方を承認する。このように、承認は本質的に相互的であり、相互承認として実現されるのである。両者の自己意識は、「相互に承認しあうものとして、承認しあう *anerkennen sich, als gegenseitig sich anerkennend*」(129/143)。

このようにして、両者の自己意識のあいだで、一方が他方のなかで自分を自分と一致し、自分を確証することが、相互的に可能となる。「各々は他者にとって媒辞(媒介項) *Mitte* であって、これをつうじて各々は自分を自分自身と媒介し、自分自身と(推論的に)連結する *zusammenschließen*。そして、各々は自分にたいしても他者にたいしても直接的な〔無媒介的な〕対自的に存在する存在者でありながら、同時にこのような媒介によってのみこのよう

に對自的である」(ibid.)¹⁴⁾。

相互承認が実現されるのは、ヘーゲルのみとおしのよれば（「われわれにとっては」）、共同体（人倫）においてである。だが、「自己意識」の章においては、相互承認の考察から直接に共同体の考察へとは進まずに、「承認の闘争」の分析、さらに「主と奴」の分析へと向かう。『精神現象学』において（中期の『哲学的予備学』、および「小現象学」においても基本的に同様）このような叙述過程が必要となるのは、自己意識論の段階では、自己意識が承認されるための主体的条件がまだ現存しないからである。自己意識が他の自己意識によって承認されるためには、それは、欲求に拘束された自然的、個別的あり方を克服し、陶冶された共同的、普遍的あり方へ高まらなければならない¹⁵⁾。だが、自己意識論の段階では、自己意識はその自然的、個別的あり方のままで直接に他人から承認を獲得しようとする。ここに承認の闘争が生じる。承認の闘争の相互承認の実現によって解決されるが、自己意識論においてとりあげられるのは、不完全で不平等な承認の関係としての主と奴の関係である。この関係においては、一方（主）はその個別的あり方に固執するが、他方（奴）は自分を普遍的なものとして形成する。

14) 『イェナ実在哲学II』においては、二人の個人のあいだで、一方が他方のなかで自分を知る（認識する）ような関係——具体的には愛の関係——は「推論 Schluß」と特徴づけられた。「このような認識は愛である。それは推論の運動であって、これによって自我のいずれの極も充実されて[おり]、このように、直接的、端的に他人のなかにある」(JR. II. 193/202)。本稿III-2-(1)-②参照。

15) この点について、1809-11年の『哲学的予備学』ではつぎのようにいわれる。「自己意識が自分を自由なものとして主張し geltend machen, 承認されるためには、自分を他人にたいして、自然的定在から自由なものとして呈示しなければならない。……自我の自分自身との絶対的同等性は本質的には、直接的な同等性ではない。それは、感性的直接性の廃棄をつうじてそのような絶対的なものとなるような同等性である」(IV. 120)。また、「小現象学」ではつぎのようにいわれる。「私が承認されることができるのは、直接的なものとしてではなく、もっぱら私が私自身において直接性を廃棄し、またそのことによって私の自由に定在を与えるかぎりである」(Enz. § 431)。

引用について

1. ヘーゲルの著作の引用のさいには、主として、
 - a. 新しい『ヘーゲル全集』(Hegel Gesammelte Werke)にもとづくマイナー社の哲学文庫版(Philosophische Bibliothek [PhB と略記し、巻数を示す]),
 - b. ズーアキャンプ社の『ヘーゲル 20 巻選集』(Hegel Werke in zwanzig Bänden [Werke. と略記し、巻数をローマ数字で示す]),
 に依拠する。
2. ヘーゲルの以下の著作は [] 内のように略記し、つづけてページ数を示す。
 - 1) *Hegels theologische Jugendschriften*, Hrsg. v. Nohl : [N.] .
 - 2) *Differenz-Aufsatz (Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems der Philosophie)*, PhB319a : [Dif.] .
 - 3) *Glauben und Wissen*, PhB319c : [GuW.] .
 - 4) *Naturrecht-Aufsatz (Über die wissenschaftliche Behandlungsarten des Naturrechts)*, PhB319b : [NR.] .
 - 5) *System der Sittlichkeit*, PhB144a : [SdS.] .
 - 6) *Jenenser Realphilosophie I (Fragmente aus Vorlesungsmanuskripten zur Philosophie der Natur und des Geistes)*, PhB331/PhB66a : [JR I.] . [R.] は欄外を指す。
 - 7) *Jenaer Realphilosophie (II) (Vorlesungsmanuskript zur Realphilosophie)*, PhB333/PhB67 : [JR II.] . [R.] は欄外を指す。
 - 8) *Phänomenologie des Geistes*, PhB414/PhB114 : [Phä.] .
 - 9) *Rechtsphilosophie (Grundlinien der Philosophie des Rechts)* : [R.] パラグラフ (§) 番号のみを記す。注解は [Anm.], Zusatz は [Zu.] と略記。
 - 10) *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse* : [Enz.] . パラグラフ番号のみを記す。注解は [Anm.], Zusatz は [Zu.] と略記。
3. 引用文中の [] 内は補訳である。傍点は原文中の強調箇所を指し、圏点は筆者が付加したものである。

[追記] 本稿の執筆にさいして、平成元年度札幌大学研究助成を受けた。